

# 河川に縁のある劇場文化

評論家・文化プロデューサー 河内厚郎



劇作家の平田オリザ氏が、円山川の流れる但馬の豊岡へ、みずから主宰する劇団「青年団」を東京から移転させた。

豊岡には舞台芸術の滞在型制作施設「城崎国際アートセンター」が2014年にオープン。演劇が学べる日本初の公立大学の芸術文化観光専門職大学も、文部科学大臣から10月に認可され、2021年4月に開学になる。あらたに劇団の拠点と



江原河畔劇場【写真提供：江原河畔劇場】

なるのは、円山川に面した旧豊岡市商工会館（築85年）を改修した木造2階建ての「江原河畔劇場」（豊岡市日高町日置）。

昨年からブレ段階として始まった「豊岡演劇祭」を、国内初の本格的なフリンジ型（自主参加型）演劇祭に育てるというのが平田氏の構想らしく、大小の劇場だけでなく、空き家や空き店舗でも上演し、見本市的な性格の演劇祭にしていきたいという。（モデルとなっているフランスのアヴィニョン演劇祭は、新型コロナウィルスの大流行抑制を図るフランス政府の方針で今年は中止となった）

もともと豊岡市の日高町は「但馬の十字路」と呼ばれる交通の要衝で、JR江原駅には特急が止まり（新劇場は江原駅から徒歩2分の国道482号沿い）、高速インターまで車で5分、空港まで10分。城崎温泉やスキー場のある神鍋高原（ここに



永楽館【写真提供：永楽館】

降る雪が円山川の豊かな水源となる）などのリゾート地を控え、近畿最古の芝居小屋「出石永楽館」もあるので富裕層も取り込めるのではないかとというのが平田氏の判断だと聞いている。

出石（豊岡市）の永楽館は明治34年（1901）に建てられた。赤茶色の土壁、大きな切妻壁、太鼓楼など建設当時の面影を今も残し、歌舞伎劇場に特有の回り舞台や花道、

## ウォーターフロントの芝居町

昨年10月、京都・鴨川の畔にオープンしたばかりのTHEATER E9 KYOTOでは、平田オリザ演出の「走りながら眠れ」が上演された。

関東大震災の混乱の中で虐殺された大杉栄と伊藤野枝。幾度にもわたる投獄という壮絶な人生をたどりながらも、どこまでも己を買いたる人の、淡々と続く生活と垣間見える死の予感――30年近く前に作られた芝居という印象はなく、俳優も生き生きとしていたが、ただし、百年近く前のアナキストの物語だと今



劇場のまち豊岡 円山川がカーブする突き当たり中央の赤い屋根が江原河畔劇場【写真提供：国土交通省 近畿地方整備局 豊岡河川国道事務所】



THEATRE E9 KYOTO

スッポン（花道のセリ）などが備わる。劇場名は出石城主・仙石氏の家紋（永楽銭）に因んで名づけられ、太鼓楼からは「木日興行あり」の太鼓を打ち鳴らした。歌舞伎の興行が中心で戦後は宝塚歌劇の公演なども行われたが、テレビが普及した昭和39年（1964）に閉館を余儀なくされた。それが平成20年（2008）に復活したときはビッグニュースとなり、以来、片岡愛之助や中村寿太郎の一座が毎年、芝居を打っている。

永楽館の傍を流れる谷山川を下ると出石川。そして、水量が豊かで流れが緩やかな円山川に合流していく。

江原河畔劇場のプレオープンは3月に行われ、ひきつづき4月29日、5月3日には二本立ての芝居が上演される予定だったが、新型ウィルスの感染防止のため中止。それでも祖父の代まで赤穂で菜問屋を営んでいた。京都の鴨川に沿った下町的な環境の中にある新しい劇場で観たわけだが、江戸の芝居小屋というのも隅川沿いに集中していた。東京になっても帝国民劇場や国立劇場は皇居のお濠端に建てられている。関西でも、江戸時代初期から興行が行われてきた京都・四条河原（今も南座が健在）、「五座の櫓」といわれて芝居小屋が林立した大阪・道頓堀（現在、本格的な劇場は大阪松竹座のみ）、大正時代に武庫河畔にうまれた宝塚歌劇、昭和期に開館した大阪・中之島のフェスティバルホール：水辺に建つ有名な劇場やホールは少なくない。水面に漂う開放感が観劇の気分にあふきわしく、もともと誰の所有地でもなかった河川の砂洲に芝居小屋や遊廓が設置されることの多かった往時の名残りであろう。

そんななかでも道頓堀五座（中座・角座・浪花座・朝日座・弁天座）の歴史的繁栄は有名であり、とりわけ

たという平田氏は、「百年後にも地球の裏側で上演される可能性がある作品を書けるのが劇作家の魅力」と話している。（同氏は日高町出身の

冒険家、植村直己を尊敬しているとのこと。2019植村直己冒険賞には、ヨットで太平洋横断に成功した、全員の岩本光弘氏が選ばれた）